

Nikkei Business

日経ビジネス

Special
AD Section

2 0 0 6

3-6

広告企画 産業立地特集

大学^発ベンチャーが地域を動かす

Interview 筑波大学副学長 油田信一氏 P.2

大学発ベンチャーが「産」「学」を活気づける

Case Study 飛躍を目指す大学発ベンチャー P.10

工場稼働で成長に挑む

テスト・リサーチ・ラボラトリーズ◎半導体の検査コスト削減戦略

メムス・コア◎先端技術のMEMSに特化

トータルケア・システム◎紙おむつをリサイクル

大学発ベンチャーが地域を動かす

また、同工場はMEMS設計用のシミュレータを一般に開放する「MEMSデザインセンター」を併設している。端末上でMEMSの設計、シミュレーションができる上、工場での試作も可能。MEMSの導入を検討する企業を対象に、基礎知識を学べる研修コースも設ける。これらは「MEMSビジネスの成長には、考える人・作る人・使う人のネットワーク創りが必要」との理

念の表れだ。地元仙台を拠点とするMEMS関連の産学官交流組織、MEMSパークコンソーシアムにも精力的に参加している。

2009年度に株式公開、2010年度までに売上高22億円達成…というビジョンを描くメムス・コア。その可能性は、複数のベンチャーキャピタルを含む各方面からの出資を獲得している事実が物語るところだろう。

を使用している。しかしリサイクルを具現化するには、学術的な裏付けに加え、リサイクルを許容する社会システムを構築しなくてはならなかった。

福岡市もバックアップ 工場稼働でパルプに再生

そこで長社長は福岡大学に研究を委託する一方、福岡県の産学官共同研究事業に応募し、認定を受けた。福岡大学の松藤康司教授との共同研究で長社長のアイデアは実証され、福岡県は補助金提供だけでなく、傘下の財団法人を通じてリサイクルの需要調査などで協力した。

福岡市も実験施設用の土地を無償提供。これら支援を背景に事業化が視野に入り、長社長は紙おむつリサイクル事業を行うトータルケア・システムを設立した。現在同社には、紙おむつ最大手のユニ・チャームや、紙おむつ回収で協力するリネン大手のワタキューセイモアなども出資している。

2005年4月には、福岡県南部の大牟田市でリサイクル工場の「ラブフォレスト大牟田」が稼働を開始。実際に使用済み紙おむつを、繊維状のパルプに再生する事業が始まっている。

現在はその再生パルプを古紙として提供しているが、将来的にはメーカーが再利用しやすい素材として提供し、リサイクルを一層推し進める方針だ。

「企業がいくら熱心に取り組んでも、リサイクルのような社会全体の協力が不可欠な事業は、企業単独では成り立たない」と長社長は言う。「学」と「官」の支援を得て企業のアイデアが結実した好例と言えるだろう。

AD

紙おむつをリサイクル 産・学・官連携で実現

トータルケア・システム(福岡市)

「販売が増えれば使用済み製品も増える。その処理の仕組みがなくてはいい」そう話すのは、トータルケア・システムの長武志社長。同社は福岡大学や自治体などと協力し、高齢者向け紙おむつのリサイクル事業の本格展開に乗り出している。

紙おむつをはじめとした高齢者向け福祉用具の販売会社を1990年に設立した長社長は、使用済み製品の処理の重要性に気づき、96年から使用済

み紙おむつの焼却場の建設準備を進めていた。しかしその翌年、焼却施設から出るダイオキシンが、埼玉県所沢市での事件をきっかけに社会問題化。長社長の構想も、焼却からリサイクルへ方針転換することになった。

もともと長社長は、自ら経営する販売会社で行う紙おむつ製品の比較テストなどで、使用済み紙おむつはパルプとポリマーなどに、リサイクルができそうなことを認識していた。しかも紙おむつは衛生用品のため良質の素材



福岡県大牟田市の大牟田エコタウン内に開設したリサイクル工場「ラブフォレスト大牟田」。
全国の企業や自治体からの視察が相次いでいるという